

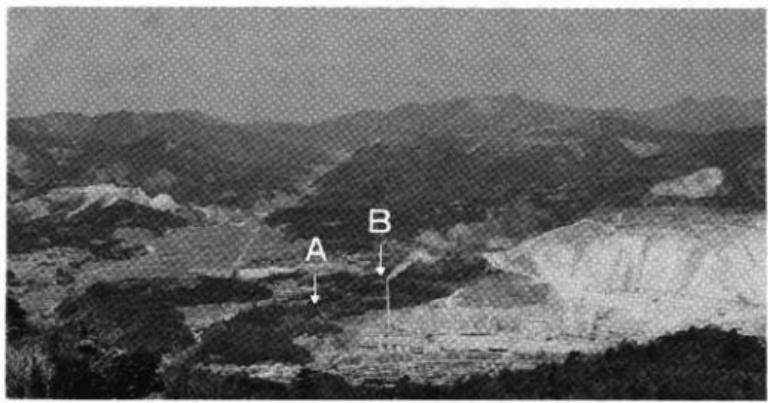
美祢市文化財資料第2集

横道古墳

美祢市大嶺町東分

1974年8月

美祢市教育委員会



(桜山山頂から大嶺盆地北部を遠望)

→ A 地区 → B 地区

序

美祢市域には、先土器時代から有史時代にかけて数多くの遺跡が発見されています。

郷土の歴史を解明してくれるこれら貴重な遺跡を保護し、また記録して後世に残すことは、私たちの責務と感じます。

美祢市教育委員会は、埋蔵文化財の保護に必要な基礎資料を得るために、年次計画に基づいて、美祢市内の遺跡の予察調査を実施することになり、第1年次に本遺跡を調査することになりました。

本遺跡は、美祢市内で数少ない古墳のうち、石室の保存状態の良い横穴式石室墳として貴重な古墳であります。今までに盗掘にあったりしている関係上、早く保護対策に必要な資料が得られることを願っていたものです。

調査は美祢市立豊田前中学校教諭河本芳久氏に依頼し、実施したものであります。本書は予察調査の記録であり、これが学術及び教育に活用されることを期待するものであります。

終りに、この調査にあたりご協力を惜しまれなかった調査員、関係者各位に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和49年8月

美祢市教育委員会

教育長 今橋完也

目 次

第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	位置と付近の概観	2
第 3 節	調査経過の概略	3
第 4 節	遺 構	5
第 5 節	副葬品とその出土状況	8
第 6 節	人骨とその埋葬状況	10
第 7 節	総 括	12

第1節 調査に至る経過

美祢市大嶺町東分横道の横道古墳群は、老年期カルストの伊佐台の標高 288 m の甲ノ上山頂の西南中腹から山麓辺にかけて立地している。

この古墳群が分布する一帯は、終戦後、開拓者の入植により山林、原野が開墾され畠地となった。開墾の際、多数の弥生式土器や土師器、須恵器が出土し、また、数基の箱式石棺が発見されたことが報告されている。箱式石棺は開墾の際、破壊され、現在その痕跡を確認することができない。^①

美祢市の郷土史家石川修二氏や杉本寛一氏などの踏査により、数基の古墳があることが早くより報告され、昭和 81 年発刊の「美祢市誌」には、横道に古墳が 8、4 基あり、いずれも円墳であることが記載されている。

美祢高校の森 恒氏も昭和 27 年頃横道古墳を調査され、古墳 5 基の確認と人骨の検出を報告されて^②いる。

昭和 43 年頃より、古墳群のある台地一帯が宅地化されてきた。また伊佐台は日本有数のセメント原料の採石場であり、機械化の採石によって年々台上は大きく変ようしている。

台地中腹にある古墳のすぐ近くまで採石が進んでおり、古墳の立地している山林は宇部興産の所有地である。

美祢市の地域開発は先原史遺跡の多い伊佐、大嶺の盆地を中心に進められており、地域開発と遺跡の保護が問題となっている。

美祢市教育委員会は、文化財保護の基礎資料を得るために、年次計画に基づき遺跡の予察調査を実施することになった。昭和 47 年度は横道古墳群の調査を実施することになった。

調査は美祢市立豊田前中学校教諭同木芳久を中心、郷土史家浜崎棟輔 秋芳町立八代小学校教諭室謙司、豊田前中学校郷土クラブの生徒 10 名の協力により実施することとした。尚、美祢市教育委員会社会教育課係長 平佐秀山、同課三上洋典が事務を担当することになった。

調査期間は、昭和 47 年 8 月 6 日から 9 日までの 4 日間である。

注① 昭和 24 年頃開墾を行なった長ヶ坪の原田五郎氏や向原開拓団に入植された高田氏の話による。

注② 美祢郡教職員組合文化部編算「美祢郡のすがた」昭和 28 年頁 29

第2節 位置と付近の景観

横道古墳は行政上、美祢市大嶺町東分横道にあり、美祢市役所北東 1.1 km の位置にある。

この遺跡の地理的位置は、わが国最大の石炭岩地城として顧名な秋吉台カルスト地域の西端に位置する伊佐台の西側中腹から台麓にある。台麓を厚狭川が南北に大嶺盆地を流れ、美祢市役所付近で伊佐川と合流している。

遺跡の位置する伊佐台は、日本最大のセメント原料の採石場であり、現在、東西の台地斜面を除いて機械化によるベンチカット方式によって採石が進められ、台地の約 $\frac{1}{3}$ が消滅している。採石跡にセメント工場が建設され、遺跡の近くに 200 m 程度 2 基が高く建っている。

伊佐台の台麓の伊佐盆地、大嶺盆地周縁には、先原史遺跡が濃密に分布しており、本遺跡の立地している付近には、弥生中期の高地性集落跡として特色ある彦山遺跡をはじめ、弥生時代から古代にかけての遺跡として、向原遺跡、曾根遺跡、國行遺跡、彦山古墳などが帶状に連なっている。また、本遺跡の西方の洪積台地上にある中村遺跡は弥生前期遺跡として注目され、住居跡や土壙が多数検出され、磨こく石が出土している。伊佐台上から石斧が発見されている。このように本地域に遺跡が濃密に分布していることは、早くより農耕集落が成立していたことを示唆すると共に横道古墳は大嶺盆地を支配していた地方豪族の墓地と推定される。

横道古墳は今まで 4~5 基あると推定されていた。台地中腹の平たん地の雜木林にある封土や石室の保存の良好な横穴式石室墳 1 基を除いて、他は古墳と断定する資料に乏しく、付近に点存する自然石と古墳の石材が一見しただけでは、区別できない状態であった。

また、封土と推測されるものはあるが、石室の確認できないものなど、古墳と判断しにくいのが現状であった。



第1図 横道古墳の位置 (○印)

500m 1km 1000m

第3節 調査経過の概略

横道古墳の調査は、昭和47年8月6日から4日間にわたって実施した。

古墳周辺の藪刈りと横穴式石室墳の石室清掃と実測に時間がかかり、古墳確認の調査が十分行なえなかった。しかし、古墳確認のための地表探査を調査期間以外に地元の郷土史家石川修二氏、杉本寛一氏の参加を得て数回実施した。

調査は台地中腹の山林地区をA地区とし、台麓の畑地区をB地区として行なった。

調査の経過及び状況は以下に述べるとおりである。

8月6日

調査はまず、A地区にある横穴式石室墳周辺の藪刈りから始めた。調査員8名で作業はなかなかはかどらず大変苦労した。A地区は山麓の畑から斜面を登った台地中腹の平坦部にあり、周辺は、雜木や杉林となっている。雜木の一部は伐採されており調査に便利となっていたが墳丘上やその周辺は藪が繁茂していた。墳丘上の雜木はそのままにし、午前中で藪刈りの作業を完了、午後石室の清掃にあたった。

~ 美門部は封土が流出し、天井石の一部が崩れ落ち、幅1.8m高さ20cm余りの穴が開き、美門部より玄室をのぞき見ることができる状態にあった。(写真3)また東側墳丘の裾の封土は流出し、東側壁の天井石の一部が露出し玄室に大人一人が出入できる穴が開いていた。(写真4)この穴より玄室に入り、落石、堆積土の状況を調べた。第4図に見る如く、東側壁に石塊が散乱し西奥壁周辺は壊乱され人骨の小片が検出された。散乱している石塊は、天井石の詰め石の一部が崩落したものであり、堆積土は天井部の封土や美門部の封土が流入したものであり、第5図のように、美門部がもっと多く堆積していた。石室の石材はすべて石灰岩であり、古墳周辺に散在しているものを利用したものと推測される。自然石をそのまま利用し、加工は施されていないようだ。

8月7日

豊田前中学校の郷土クラブの生徒10名の参加を得、作業は順



調に進んだ。玄室の西側半分の排土作業を行なった。奥門部より排土作業ができるように計画し、玄室東側は今後の調査のために現状のままにして調査を進めることにした。

排土作業が進むにつれ奥壁寄りが礫床になっていることを確認することができた。

玄室の床面全体が礫床であったかどうか判明できないが、人頭大の自然石塊を床面に敷き埋葬がなされたものと推定される。(写真12)床面及び擾乱土より人骨と歯が多数検出され、頭がい骨、大たい骨など大きい骨は奥壁に近い場所より多数検出された。齒の数、人骨から察して、数体の埋葬がなされたことが考えられた。副葬品は少なく、鐵器類、土器類が少量検出された。かく乱土から検出されたものの中元の位置を確かめることは困難であったが、副葬品は奥門に近い場所より検出されたものである。かく乱土をふるいにかけていたところ、弥生式土器が検出された。これは、天井部の封土に含まれていたものが流入したものと推定される。

8月8日

午前中奥門部付近の排土作業を進め、須恵器と、と石を検出した。伊佐セメント工場の採石ダイナマイトの爆発振動が激しいので、天井石に支えの木を置き、排土作業と石室の実測にあたった。

午後、中学生7名の参加を得て、A地区、B地区の石墳確認のための地表探査を実施した。

8月9日

調査員8名で石室の実測とA地区の平板測量を実施した。

第4節 遺構

横道古墳の調査は、遺跡保護上の基礎資料を得るための予察調査であった。

既報の知見によると横道には4~5基の古墳があるとされていたが、今回の調査で、古墳7基を推定することができた。ただしA地区の横穴式石室古墳1基を除いては、他は古墳と断定できる資料を今回の調査で十分得ることができなかつたので今後の調査によって解明しなくてはならない。

1 A地区

A地区は台地中腹の山林で宇部興産の所有である。第8図に見る如く、5基の古墳を推定できる。

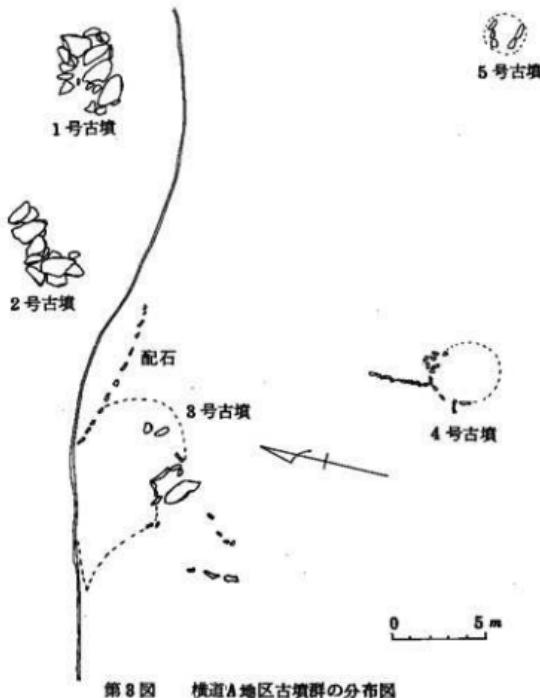
1号古墳、2号古墳、5号古墳は封土ではなく古墳の石材の一部と推定されるものがある。しかし周囲にはラビエが露出したり、ころがったりしている関係もあって、古墳の石材を点在する石灰岩の自然石とを一見しただけでは区別できない状態であった。

1号古墳は、側壁と天井石と推定されるものがセットされた状態で現存し、堆積土から須恵器の小片を検出した。上記の資料から一応古墳と推定した。(写真5)

2号古墳は、平板状の石灰岩が散在し、周辺のラビエの状況からして人為的な集積状況である。古墳の崩壊した石材かまたは、8号古墳構築の際、残された石材か断定しかねるが、石材の集積状況からして古墳の崩壊したものと推定した。(写真6)

第3号古墳は既に知られていた横穴式石室古墳である。再三、盗掘にあい人骨や副葬品が持ち出された報告を受けている。封土もよく保存されており、地元の人々は「鬼の穴」と呼んでいた。今回の調査は8号古墳を中心に進めた。(写真2)

第4号古墳は周辺の地形とは異なり封土らしいわずかの盛り土がある。今後盛り土にトレントを入れ、古墳であるかどうか判定すべきであるが、今回は盛り土の状態、周辺の石組みからして、古墳と推定



第8図 横道A地区古墳群の分布図

した。従来の知見では 8 号、4 号、5 号古墳を横道古墳と報告されていたことを今回の調査で知ることができた。第 4 号古墳については、盛り土の状況からこれを古墳と断定することには疑問が残るが一応古墳と推定し報告する。(写真 7)

第 5 号古墳は天井部を欠くが玄室の側壁は現存し、古墳と断定できる。封土はなく、天井石を欠損した状態で埋没しているので、よほど注意してみると古墳の存在すら分らないほどである。

2 B 地区

B 地区は山麓の畑の地区で、土地所有者は美祢市大嶺町長ヶ坪、原田五郎氏である。山林を駆け廻る煙としていたものである。開墾の際、箱式石棺を発見したとの報告を受けているが、現在その痕跡を確認することができない。畑の南縁に石灰岩の集積した盛り土がある。羨道部と推測される横穴が西に開口しており、衡石が一部欠損しているので、羨道と断定しかねるが、須恵器片を 8 個検出し幅 1.8 m、厚さ 20 ~ 30 cm の平板状の石灰岩が羨道の天井石と推定できるものがあることや、2 m 余りの盛り土、石組みなどからして、これを 6 号古墳とした。古墳全体が梅の木の茂みにあり、精査することができなかった。

6 号古墳上段の畑の東縁に、径 3.8 m 余り高さ 1.8 m の盛り土を認めることができる。(写真 8) 畑の縁で上段は杉林であるが切り替え畑であり、盛り土の頂上は上段の畑と同じ高さとなり、古墳とすぐ断定しかねる。上段の杉林とは、石垣によって段が作られているが、この盛り土の中から石塊を検出することができる。封土らしきもののみで、これを古墳と報告してよいかどうか疑わしいが、今まで古墳として報告されているので一応 7 号古墳として記載する。

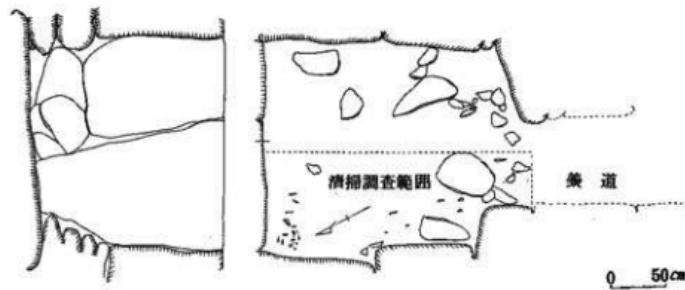
3 第 3 号古墳

石室 石室は、南西方向に開口した单室の横穴式のものであり、古墳の内部主体は墳丘のはば中央部に構築され、付近にある石灰岩の自然石を利用している。古墳の内部は以前盗掘にあり、床面はかなりかく乱されていた。第 4 図に見る如く、玄室の平面は、正方形の形をし、玄門部でやや狭くなっている。玄室の奥行 2.1 m、奥壁幅 1.9 m、高さ床面より 1.8 m を測る。この石室の羨門は両袖式の形態であり、右袖部は左袖部より大形の石材を 1 個使用し、張り出して区画し、左袖部は小形の石を 1 個使用し、袖をしている。羨道は左側に片よっている。羨門側の幅は 1.7 m であり、羨道部は、天井石が崩落し側石が埋没した状態になっている。今回は第 4 図の如く玄室の西半分の消清調査だけ終り、羨道部については発掘しなかったので、羨道床面、側石の埋没状況は不明である。

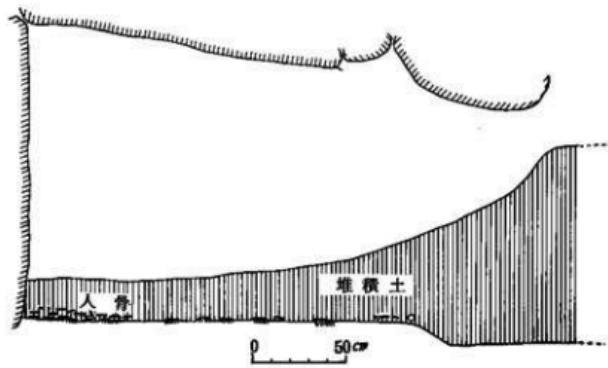
奥壁は 2 枚の巨大で扁平な石灰岩の自然石を内面を直面にして、小型の石塊を上部に、持ち送り状に積み上げて構成されている。(写真 11) 他の側壁では奥壁の石材より小型の石灰岩を各 2 枚ずつ継位置にし、その上に 2 ~ 3 段自然石を横位置にして積み重ね、四壁をドーム状にせり出させて、2 個の自然石の天井石を置き、すき間に 1 個の小形の天井石をのせている。羨道部はどのくらいの長さがあったのか不明である。しかし残在している側石は第 4 図に見る如く、東に 2 枚の自然石の側石を從置し、約 80 cm を測る。西側にも 2 枚の側石を從置し、1.4 m を測り、幅は 1.8 m である。これに天井石を置いていたのであるが現在は崩落している。その一部と推定されるものが写真(2)に見るよう現存している。

床面 この古墳の玄室部の床は、ほぼ水平にされた地山の上に古墳周辺にある石灰岩の塊石を敷いていたものと推定できる。奥壁西側には径 30 cm 内外の大きな塊石を敷きつめているが第 5 図に見る如く、玄室中央部ではなくっている。奥壁近くの床面より写真(4)のように人骨が多数検出された。

清掃調査は床面まで堆積していた土を除去したのであるが、羨道部で床面が12cm余り一段低くなっている。(第5図)。これは排水のために羨道部を一段低く施設したものではないかと推測される。



第4図 横道第8号古墳の石室平面及び奥壁断面実測図



第5図 横道第8号古墳断面実測図

第5節 副葬品とその出土状況

1 出土状況

1号墳の石室と推定されるか所より須恵器の小片を堆積土の堆表面から検出した。また6号古墳の羨道部と推定されるか所より須恵器の口縁部を検出した。

8号古墳以外は、清掃調査を実施しなかったので、遺物の出土状況について述べることはできない。1号墳、5号墳、6号墳については、石室や羨道部を調査し、副葬品の有無を確認することが必要と考えられる。

5号古墳 玄室の天井部の一部が開口し、しばしば盗掘がなされ、人骨、齒、土器類が採集されたことを今回の調査で地元の人々から聞きとることができた。

清掃調査は羨道部を除き、玄室の西側半分(第4図)であったためか、副葬品の検出は少なかった。しかし人骨と齒が多数検出された。このことは本古墳が数回にわたり埋葬がなされたことを示唆している。

石室内で検出された遺物は、須恵器(平瓶)(写真15)、埴形土器(瓦器)(写真16)、土師器(写真17)、鉄製品(写真20、21)、砥石(写真19)、弥生式土器片(25片)(写真18)である。これら副葬品はかく乱土から検出されたものが大部分であり、副葬状況について明らかにすることができない。

副葬品は玄門附近で検出されたものが多く、床面からは検出されなかった。人骨については、床面から、大たい骨などの大型の骨が奥壁付近で多く検出された。

動物の歯として、しか、犬の歯が人の歯といっしょに検出された。弥生式土器、齒については、堆積土をふるいにかけて検出したもので、検出状況について明らかにすることはできなかった。(写真9)

2 副葬品 (3号古墳出土)

遺物は鉄製利器、土器の組み合わせと推定される。古銭や砥石を副葬品として推定してよいかどうか判断しかねる。瓦器は後世持ちこんだものと推定される。また弥生式土器は封土築成の際に混入したものと石室に流入したものと考えられる。

○須恵器(埴形土器) 図版14

今回の調査で検出されたものではなく、大嶺町北分の小倉氏によって採集されたものを美祢市教育委員会が保管していたものである。出土状況については不明である。口径12.2cm、器高3.9cm、口縁部の立ちあがりは比較的低く、かなり内傾する。体部には張りが見られず、器面の内側に段がある。色調は青灰色で焼成は良好である。外側器面に横なでの刷毛目があり、外側底はへら削りの跡が明瞭である。

○須恵器(平瓶) 図版15

胴が比較的扁平でその上面に中心をはずして、口縁部をついている。肩に直径1cmの円板が装飾されている。口縁部は外反し一部欠いているが、口縁底部9cm口縁部までの器高5.9cm、胴最大径は9.6cmで小型の平瓶である。色調は青灰色で焼成は良好である。玄門部の床面からふせた状態で出土した。

○土師器 図版17

径6.9cm余りの土器破片であり、実測は不可能である。破片の状態からして、胴部と推定される。

器の外側、内面とも朱塗りやだしめがされている。胎土は、精良でわずかの砂粒を含んでいます。

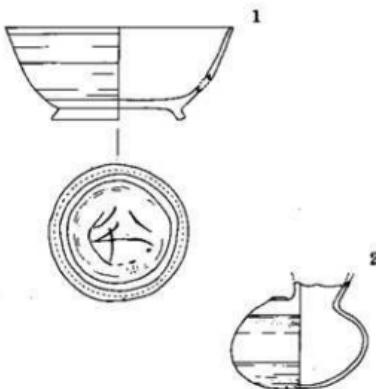
○弥生式土器 図版 18

小破片で図上の復原すら困難なものばかりであり、検出された25片の土器片は向一體ではなく、色調、焼きの状態からして4~5固体に相当するものと推定できる。

色調は赤褐色、黒褐色、褐色、赤色と分けられ、いずれも胎土に砂粒を多數含んでいる。山形文や1条の四線を施した土器が含まれている。封土に混入していた物が、玄室に流入したものと推定される。古墳の立地する台地中腹は平坦となっており、弥生時代の遺跡があることを示唆している。

○瓦器（埴形土器）図版 16

底部に口縁部の破損したものが附着した状態で検出された。色調は内面が白色で、外面は灰黒色であり、焼きはやわらかい。胎土は精良で砂粒を含まない。成形のためにけの跡がある。第6図8埴形土器を見る如く、底部にへら書きの印が施されている。何を意味するか判定しかねるが、意図的に施さ



第6図 横道第8号古墳出土
の土器実測図

れている。器高は6.8cm、口径15.4cmで底部は上げ底になった埴形土器である。

○石器（砾石）図版 19

全長9.7cm、面の幅2cmの破損品で、一面のみを使用している。岩質は青灰色の粘板岩で、側面は剥離跡があり、縁のみ二次加工がわずかに施されている。玄門部の堆積土より検出した。

○鉄器 図版 20, 21

玄室中央の床面近くより出土した鉄鎌（第7図）全長11.4cm平根鎌である。

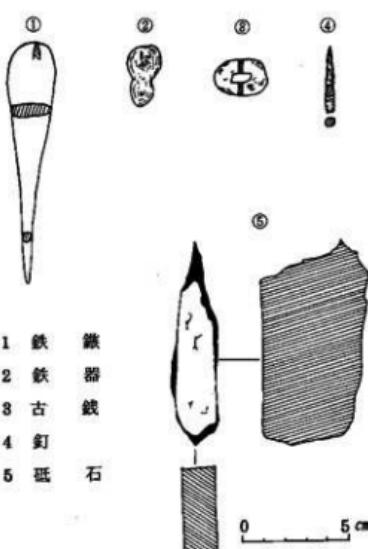
古鏡と古釘が1個ずつ検出されたが、堆積土をふるいにかけて検出したもので出土状況については不明である。また第7図⑤のような鉄器を検出した。だるま状で装飾器具の一部ではないかと推定される。

○6号古墳出土の須恵器

口縁部は外反し、内面は器面調整のため、は毛の跡が明瞭に認められる。

色調は青灰色で焼きは良好である。

6号古墳の羨道部と推定されるか所より検出したものである。



第7図 横道第8号古墳出土の鐵器と
砾石の実測図

第6節 人骨とその埋葬状況

横道8号古墳からは、数体の人骨と多数の歯牙が検出された。

人骨片の多くは、北側壁に近い部分で検出され、大腿骨や、胫骨、頭骨などは床面より検出された。歯牙は堆積土をふるいにかけて検出したので、その層位を明確にすることはできなかつた。また、玄室内はかなり、かく乱されていたので、埋葬状況を今回の調査で察推察することは極めて困難である。

○人骨の検査結果 美祢市大嶺町 渡辺外科医院 渡辺一郎医学博士

上 腕 骨 (幼児1 成人8)
脛 骨 (成人4)
大 腿 骨 (成人5)
尺 骨 (成人8)
指 骨 (幼児1 成人4)
鎖 骨 (成人6)
下 頸 骨 (成人8)
頭 骨 (成人4)

上記の結果、幼児1個体、成人5～6個体分の遺物であると推定される。

○歯牙の検査結果 九州歯科大学教授 山田 博

検出された歯は骨に付着していたものではなく、おのの遊離していたもので、確実を断定を下すことは非常に困難である。しかし歯の所見については、下記の点が推定される。歯について検討してみると、乳歯及び永久歯が混在し、また、永久歯については、おそらく萌出しようとしているものも散見される一方、かなり咬耗が進んでいるものもあって、かなりの層をもった年令層のものを含んでいると推定される。

以下、歯による年令別分類によってみると次の如くである。

- (1) 3～5才のもの1例
乳歯のみで上下顎の第1大臼歯が各1本あるが、これはまだ骨の中にあって未萌出のものと思われる。
- (2) 10～14才のもの2例
歯根が未完成で、また咬耗も少ない。
- (3) 20～30才のもの3例
咬耗度1^o～2^oである。
- (4) 30～40才のもの2例
咬耗度2^o～3^oである。

(5) 40～50才のもの1例

咬合度 \pm である。

以上、合計9体分のようである。

しかし9体分の歯牙であるという確実な断定は下し得ないが、まず9体前後の個体数はあったものと推定される。また歯と骨とが同一個体のものであるかどうかについては判らないが、大部分は同一のものであろうと考えられる。

以上の結果より次の如く推定できる。

(1) 個体数は9体前後と思われる。

(2) 年令は小児より成人に至るまでのものがあり、8～5才(1例)、10～14才(2例)、20～30才(3例)、30～40才(2例)、40～50才(1例)である。

(3) 性別については判定し難いが、女性のものではないかと思われる歯も見かけられたことから、男女とも混在しているようである。しかし、男性の方が多いように考えられる。

第7節 総括

今回の横道古墳の予察調査の結果を次のように要約することができる。

1. 伊佐台南西中腹のA地区より古墳と推定できるものが5基確認された。また、台盤のB地区より古墳と推定できるものを2基確認した。横道地区には、3号古墳を中心にして、他に6基の古墳を推定でき、美祢市の古代文化の解明に欠かすことのできない遺跡として重要なものである。
 2. 台地中腹のA地区は、3号古墳の封土に弥生式土器を含むことからして、これら古墳築造以前、すなわち、弥生時代に、村落があったことが考えられる。B地区には箱式石棺が発見されたり、土師器を含む遺物包含層が確認されていることからして、弥生時代から、古墳時代にかけて、横道地区にはかなりの村落があったことが推定できる。
 3. 8号古墳は単室の横穴式石室で羨道部が崩壊しているが、美祢市内で発見されている古墳のうち、石室が一番よく保存されている。石室は附近に散在する石灰岩の自然石を利用して構築されている。
 4. 8号古墳は玄室の西側半分の清掃調査であった。その結果、玄室西側半分だけで9体前後の埋葬が推定できる。幼児や成人男女が埋葬されていたことは、この古墳が家族墓として使用されていたことを示唆している。
 5. 1号、4号、6号、7号古墳については積極的に古墳と断定できる資料を今回の調査で得ることができなかつたので、今後精査を実施する必要がある。
- 上記のごとく、横道古墳群は美祢市内では、数少ない貴重な古墳と云ってよく、清掃調査によって古墳の実態を知る資料が得られたことは幸いである。
- 尚、将来、横道古墳のある地域の土地を変更する場合は、周辺地域の調査と、第8号古墳を除いた他の古墳の調査を行ない、横道古墳の解明に努力しなくてはならない。
- また、第8号古墳については、今後、盗掘されないような保護対策を早急に講じる必要がある。

図版



図版 1

横道古墳群遠望と伊佐セメント工場（桜山山頂から）



図版 2

截りをすませた第 8 号古墳（南から）



図版 8

調査前の第 8 号古墳表道部（南から）



図版 4

第 8 号古墳封土流出し開口した天井石の一部

（東から）



図版 5

第 1 号古墳の側石と天井石（南西から）



図版 6

第 2 号古墳の石材散在



図版 7

第4号古墳の封土(西から)



図版 8

第7号古墳の封土(西から)
(人物は郷土史家石川修二氏)



図版 9

第 8 号古墳の調査



図版 10

調査に参加した豊田中学校郷土クラブの生徒

図版 11



第 8 号古墳の側石と天井石の一部

図版 12



第 8 号古墳奥壁近くより出土した人骨と練床

図版 13



第 8 号古墳鐵鎌の出土状況と練床面

図版 14



須恵器 坯形土器



埴形土器



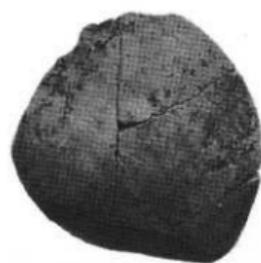
(ま 上)



(正 面)

須恵器 平瓶

第 8 号 古墳 出土の遺物



土 師 器



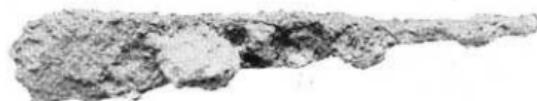
赤 生 式 土 器



砾 石



①釘 ②古銭 ③鐵器



鐵 錄

第 8 号 古 墓 出 土 の 遺 物



第 8 号 古 墓 出 土 の 人 骨

0 5 cm

美祢市文化財資料第2集

横道古墳

編著 河本芳久

発行 美祢市教育委員会

昭和49年8月

印刷 大同印刷
